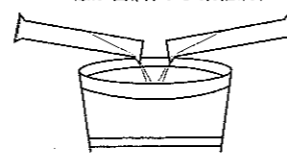
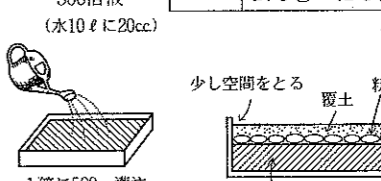
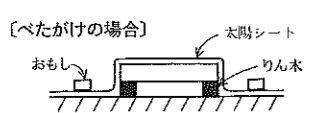



平成21年度 普通期水稲栽培基準

田植の目安：中山間地6月5～15日・平坦地6月10～20日

発行 五島市農業振興対策協議会
ごとう農業協同組合

1. 育苗手順(稚苗)

<p>① 種子の準備</p> <ul style="list-style-type: none"> ○良質米生産のためには毎年種子更新を行う。(穂こうじ病などの発生した圃場の種子は絶対使用しない) ○奨励品種(ヒノヒカリ)を用いる。 ○10a当たり4kg準備する。 	<p>② 塩水選</p> <p>生卵による比重調整</p> <p>塩水の作り方</p> <table border="1"> <tr><td>水10ℓ当たり食塩(精製)</td><td></td></tr> <tr><td>うるち</td><td>約1.5kg</td></tr> <tr><td>もち</td><td>約1.1kg</td></tr> </table> <p>水面に百円玉大に浮く</p> <p>1.10 うるち</p> <p>1.00 水</p> <p>1.08 もち</p> <p>○選別後、塩分が完全にぬけるよう流水で数回洗う。</p>	水10ℓ当たり食塩(精製)		うるち	約1.5kg	もち	約1.1kg	<p>③ 種子消毒</p> <p>スミチオン乳剤 10cc(1000倍) 心枯線虫 ヘルシードTフロアブル 50cc(200倍) ほか苗病、ごま葉枯病、いもち病</p> <p>水、10ℓ</p>  <p>○混合液に24時間、時々攪拌しながら浸す。 ○薬液の温度は10℃以上とすること。</p>	<p>④ 浸種(4~5日間)~催芽</p> <ul style="list-style-type: none"> ○真水を用い、停滞水中に充分浸種する。 ○水は毎日取り替え、種籾を上下によく混ぜる。 ○種籾が、ほと胸状になったら止める。 ○積算温度100℃で、ほと胸状になる。(25℃で4日間) <p>正しいハト胸状 伸びすぎ</p>	<p>⑤ 床土入れ</p> <ul style="list-style-type: none"> ○床土の準備：山土を利用する場合は、冬期に乾燥させておく。 ○育苗のとき 20箱以上、100ℓ(みどり培土を用いてもよい)。 ○育苗箱はよく洗い、日光でよく乾燥させる。又は薬剤消毒(イチバン1000倍液に瞬間浸漬)する。 ○土のpHは4.5~5.5が最適。 ○床土は均一に入れるように注意する。太陽シートを利用した平置育苗では、覆土の量を従来よりも1~2割増やす。 	<p>⑥ 播種</p> <ul style="list-style-type: none"> ○種をまく前に ダコニール1000 500倍液 (水10ℓに20cc) ○播種量(催芽籾) 稚苗 170g(1.5合)  <p>1箱に500cc灌注</p> <p>少し空間をとる 覆土 粉 床土</p>		
水10ℓ当たり食塩(精製)													
うるち	約1.5kg												
もち	約1.1kg												
<p>⑦ 平置き育苗(太陽シート利用)(5日)</p> <p>〔べたがけの場合〕</p>  <p>○平置育苗について 播種、覆土後、育苗箱を日当たりの良い平坦な場所に段積みせず、1箱ずつ並べ、太陽シートで直接被覆(べたがけ)する。</p> <p>〔トンネルの場合〕</p>  <p>○育苗の可能な時期 播種は気温が充分高くなる5月下旬以降に行う。</p>		<p>⑧ 硬化 適温15~20℃</p> <ul style="list-style-type: none"> ○本葉1.5葉期になったら徐々に外気に慣らす。 ○灌水は午前中に行い、夕方を避けるよう注意する。 ○ツマグロコバヤの飛込防止のため周囲に高さ1m程度の寒冷紗を張る。 		<p>⑨ 田植</p> <p>田植の目安(健苗の基準)</p> <table border="1"> <tr><th>苗の種類</th><th>育苗日数</th><th>葉齢</th><th>草丈</th></tr> <tr><td>稚苗</td><td>20日</td><td>2.2葉</td><td>12~13cm</td></tr> </table> <ul style="list-style-type: none"> ○田植前日に病葉枯病(ヒメトビウンカ)・イネミズゾウムシ、いもち病、コブノメイガ・ツマグロコバヤ予防のため、ビームアドマイヤースピノ箱粒剤を箱当たり必ず50g散布し、灌水する。 ○1株本数は3~5本を目安とする。1㎡当たり24株確保する。 		苗の種類	育苗日数	葉齢	草丈	稚苗	20日	2.2葉	12~13cm
苗の種類	育苗日数	葉齢	草丈										
稚苗	20日	2.2葉	12~13cm										

2. 本田：栽培及び防除基準(ヒノヒカリ) ①印は必須防除です

項目	生育と管理作業	病虫害名	農薬名	10a当り使用量	防除上の注意事項
5	中下 荒耕し	ヒメトビウンカ(縞葉枯病)	※5月中旬~6月中旬の第一世代成虫期の荒起しにより、産卵防止並びに生息環境を除去する。		※早播き、早植えは発生を助長するので、播種及び田植は適期に行うよう努める。
6	上中下 田植え 除草剤散布 分けつ肥 または浅水 間断かん水 または中干し	ウンカ類 いもち病 コブノメイガ イネミズゾウムシ ツマグロコバヤ	ビームアドマイヤースピノ箱粒剤	箱当たり50g	○残効目安は、ウンカ類60日、コブノメイガ45日、いもち病50日程度である。 ○早植え地帯でイネミズゾウムシの飛来が多い時は、シクロバック粒剤10パックを移植後2~3週間後に散布する。
7	上中下 溝切り作業 最高分けつ期	コブノメイガ ウンカ類 穂いもち(予防) 紋枯病 白葉枯病	バダンバッサ粉剤DL オリブライト1キロ粒剤	4kg 1kg	○溝切り機を利用し中干しを励行する。 ○目標穂数の8割の基数になったら中干しに移る。(目標1株平均18本なら15本より中干し) ○バダン剤は露がとれてから散布する。 ○粟いもち初発から収穫45日前(8/上)までに散布する。
8	上中下 穂肥(1回目) 穂肥(2回目) 出穂期 穂揃期	コブノメイガ ウンカ類 穂いもち カメムシ類 コブノメイガ ウンカ類	バダントレボン粉剤DL モンセレンランナー粉剤DL ブラシジョーカー粉剤DL	4kg 4kg 4kg	○カメムシ防除のために、出穂10日前に畦畔の草刈りを行う。 ○初枯細菌病多発のおそれのある時は、スターナ粉剤DL(4kg)を散布する。
9	上中下 糊熟期 間断かん水	カメムシ類 ウンカ類	キラップ粉剤DL	4kg	○カメムシの防除は、穂揃期の夕方に一斉に防除する。 ○穂揃期10日後の夕方に一斉に防除する。 ○ウンカ類の発生が多い場合はバッサ粉剤を散布する。
10	上中 落水 成熟期	○出穂期とは、全茎数の40%~50%出穂した日。 ○穂揃期とは、全茎数の80%~90%出穂した日。	落水と適期刈りの目安(出穂後)	適正乾燥の目安(水分率) 玄米冷却時14.5~15.5% ※機械乾燥の場合、余熱を考慮し、16%程度で火を止める。	

※適正な水管理の実施(作溝による中干し・早期落水防止)!!

3. 施肥基準(10a当り)

基肥	分けつ肥		穂肥		合計のN-P-K	摘 要
	肥料名(N-P-K)	量	肥料名(N-P-K)	量		
BB有機入り五島産米ヒカリ専用肥料	20kg	BB有機入り五島産米ヒカリ専用肥料	10kg	くみあいBBヒカリNK1号	10kg	<ul style="list-style-type: none"> ○分けつ肥は、田植の7~10日後に施用する。 ○穂肥の時期(8月25日出穂ヒノヒカリの場合)第1回：出穂の18日前(8月7日頃)第2回：出穂の10日前(8月15日頃) ○施肥量は、生育と気象により増減する。 ○レンゲ草など飼料作物跡では基肥量を減じる。 ○十分に中干しができない地区は分けつ肥を減らす。
				くみあいBBヒカリNK1号	5kg	
【土づくり対策】 <改良資材>		一般田……鉄カリ80kg または 鉄5郎80kg 秋落ち田……鉄カリ80kg+BM苦土重焼りん20kg または 珪鉄300kg+BM苦土重焼りん20kg				
<完熟堆肥> <深耕>	1,000kg 目標作土深 15cm以上					

4. 除草剤使用基準(10a当り)

薬 剤 名	使用量	使用時期	対象雑草及び特徴	注意事項
サラブレッドRXフロアブル	500ml	移植直後~15日ノビエ2.5葉期まで	一年生雑草、ミズガヤツリ、ホタルイ。 使用前に容器を振って液を混ぜ、容器を大きく振って散布。 強風時の散布は、隣接作物への薬害と薬剤の拡散不良に注意。 SU抵抗性ホタルイ・アゼナなどに効果を示す。	○軟弱徒長苗には使用しない。 ○砂質土壌等漏水田での薬害注意。
トレディワイド1キロ粒剤	1kg	移植後5日~ノビエ3葉期(但し、移植後30日まで)	一年生雑草、ウリカワ、ミズガヤツリ、クログワイ、藨類による表層はく離。 SU抵抗性ホタルイ・アゼナなどに効果を示す。	○粒剤は3~4cmの湛水状態で散布し、そのまま4~5日保つ。 ○フロアブル剤は散布後湛水状態を4~5日保つ。
ミスターホームランドLジャンボ	小包装10/パック(500g)	移植後1~12日ノビエ2葉期まで	一年生雑草、マツバイ、ホタルイ、ウリカワ。 藨や浮き草が多発していると拡散が不十分で、効果が劣る。 SU抵抗性ホタルイ・アゼナなどに効果を示す。	○ジャンボ剤は散布時に5cm以上の深水とし、その後通常の湛水深とする。

※) 草種によって剤を選び、じょうずに使しましょう。

5. 農薬使用基準

農薬名	収穫前使用時期	総使用回数	農薬名	収穫前使用時期	総使用回数	農薬名	収穫前使用時期	総使用回数
スミチオン乳剤	播種前	1回	シクロバック粒剤	60日前	4回以内	キラップ粉剤DL	14日前	2回以内
ヘルシードTフロアブル	浸種前	1回	バダントレボン粉剤DL	21日前	3回以内	モンセレンランナー粉剤DL	21日前	3回以内
ダコニール1000	播種時	1回	ブラシジョーカー粉剤DL	21日前	2回以内			
タチガレン液剤	発芽後	1回	バダンバッサ粉剤DL	21日前	5回以内			
ビームアドマイヤースピノ箱粒剤	移植2日前~前日	1回	バッサ粉剤DL	7日前	5回以内			
オリブライト1キロ粒剤	45日前	1回	スターナ粉剤DL	21日前	2回以内			

※病虫害発生情報を電話でサービスしています。

TEL 74-2999へどうぞ!!

平成21年1月22日作成

※良質米生産のために種子更新を徹底しよう!

※追肥重点!穂肥のやれる施肥設計!!

※農業散布はマスクをつけて安全に地域ぐるみで適期防除!
※農薬使用時には必ずラベルを確認しましょう!!
※粉剤の使用については飛散に注意しましょう!!
適期刈取り適正乾燥!!